



祐介の目

大田ゆうすけ
(福山市議会議員)

No.40

毎月1日号に掲載

材だ。マンガ漁という力ガ爪付きの底引き網で根こそぎ獲ってしまったからではないか。

海外に目を向けると、ノルウエー、米国など、多くの先進国の漁業が経済的に成長を続けている。今の日本と同じような状況から、政治主導による政策の転換によって、漁業を成長産業に導いたという。これらの国に共通して導入されているのが個別漁獲枠制度「IQ制度」である。

IQ制度とは、十分な産卵親魚を確保できるように全体の漁獲枠を設定した上で、早獲り競争を防ぐために漁獲枠を個々の経営体に配分する資源管理手法である。IQ制度を導入することで、水産資源が生み出す価値を増やしつつ、得られた利益を漁業者間で公正に配分する。そして、①資源の持続可能な利用、②競争の緩和によるコスト削減、③魚のサイズ・品質の改善による単価の向上等の効果が期待できる。

このように漁業者が豊かになり、国民の食卓が豊かになる本政策は、アベノミクスよりよほど多くの恩恵をもたらすのではないかと感じている。

私の政策、河口堰開放と併せて実現できれば相乗効果で瀬戸内の漁業が再生するだろう。

日本の漁業改革

師走の総選挙が終わった。福山の投票率は47%という低率であったが、短期決戦ゆえに候補者の訴えが有権者に届かなかったのかもしれない。

小林史明候補が訴えていた政策の中に、漁業の資源管理という聞き慣れない言葉があった。じつはこの2年間、彼が自民党内で最も注力したのがこの問題だったそうだ。彼が代表を務める「若手水産研究会」は個別漁獲枠（IQ=Individual Quota）制度導入を柱とする提言をまとめ、今後、水産部会などで議論を深め、政策としての実現を目指しているそうだ。

従来日本の漁業は獲れるだけ獲りつくすスタイルであり、北海道にはニシン御殿が建ったが、その結果ニシンはいなくなつた。今や数の子はほとんど輸入である。瀬戸内海でも一昔前に輛に行けばシャコが干円でバケツ一杯買えたが、今やシャコやワタリガニは高級食